

〈研究ノート〉

## 高齢化社会と地域福祉 (12)

——沖縄県平良市における事例研究<sup>1)</sup>——

日隈 健壬・広田ともよ

(受付 2003 年 10 月 14 日)

### 目 次

はじめに

第1章 調査地の概略

第2章 平良市の福祉行政（聞き取り）

第3章 池間島の現状と課題（聞き取りと文献）

第4章 個別聞き取り調査

### は じ め に

いわゆる「長寿」を示す指標は「平均寿命」で代替されるほど単純ではないらしい。

それでは、なぜ沖縄は日本の中で最も「長寿県」といわれてきた根拠があるのか。松崎俊久（1993、『沖縄発爽やか長寿の秘訣』、学苑社）によると、平均寿命に加えて、「65歳以上に占める90歳以上者の割合」、「人口10万人当たり百歳以上者数」など、「長寿率」を総合的にとらえて「長寿」の指標化を行うと、一位は沖縄県で、二位は高知県、三位は島根県とつづく。百歳以上者の絶対数では沖縄は七位であるが、松崎方式で算出すると一位となる。

それでは沖縄は歴史的にも「長寿県」であったかどうかということ、秋坂

---

1) 本研究は広島修道大学総合研究所研究費によるものである。また仁井谷薫（本学大学院人文科学研究科社会学専攻学生）が研究補助、方言通訳は柴田千代治（福岡大学）が行った。

真史 (2001, 『沖縄長寿学序説』, おきなわ文庫, P.52) は, 太平洋戦争前においては, 伝統的に群を抜く長寿地域であった, と述べている。また, 長田紀秀も琉球王朝時代の沖縄女性の長寿性を強いている (長田紀信, 1963, 『沖縄の長寿者』, 安木屋書房)。

それでは, 沖縄における長寿に影響を与えていると考えられている因子 (要因) は何か, 一般的には「食生活」, 「気質」, 「文化」, 「社会」, さらに「遺伝子」などがあるが, 沖縄の場合, 「気候」が長寿の「環境因子」として言われてきた。とくに沖縄の自然のもつ力は高く評価され, 海との共存, 集落が湧泉のある飲料水に恵まれていたことなどが多くの説明であり, そのまた長寿環境としての土壌は生命の水に対して生命の土とまで言われた。沖縄の土壌は, サンゴ礁から湧き出る石炭分を含み, とりわけカルシウム含有量が本土と比べて豊富であるというのが長寿の秘訣らしい。秋坂真史 (2001, 前掲書, P.83) によると, 沖縄の百歳と全国の百歳を摂取食料で比べると, 沖縄は「飲料摂取」で全国を大きく上回っている, と紹介している。ここでの飲料は, ほとんど「お茶」である。

本調査研究は1999年より行ってきた「高齢化社会と地域福祉」の継続研究である。これまで広島県芸北町, 愛媛県宇和島市及び近郊, 韓国全羅南道康津郡及び霊巖郡などをフィールドに高齢者の日常生活行動・意識などに関する標本調査を行い, 要因分析及びそれらの再構築を試みてきた。その結果, 高齢期の健康寿命期間の長・短にかかわる要因として, ①自立できる生活環境, ②家族や地域内での精神・情緒面でのサポート, が寄与率の高いものとして挙げられた (『加齢に生きる人たち』日隈健壬他, 広島修道大学研究叢書第128号, 2003年6月参照)。

その確認のため, 日本で最も健康寿命が長いと言われる「長寿」沖縄県をフィールドに設定した。今回の池間島 (平良市) の調査の目的は, 長寿のライフスタイル, いわゆる生活習慣, 生活行動において共通のパターンが見られるという仮説の検証にあった。日常生活, 運動, ADL, 趣味, 娯楽などの聞き取りを行うことにあった。しかしながら今回の調査はその先

行調査（行政の文献，聞き取りが主）に終わっている。

## 第1章 調査地の概略

沖縄県の人口は，今日1,318,220人（平成12年度国勢調査）であるが，そのうち65歳以上の老年人口は13.8%と全国平均よりも低いが，65歳以上の老年人口の中での構成比をみると，85歳以上の後期高齢者の占める割合は15%と，全国1位で，「超高齢化」は最も進んでいると言える。

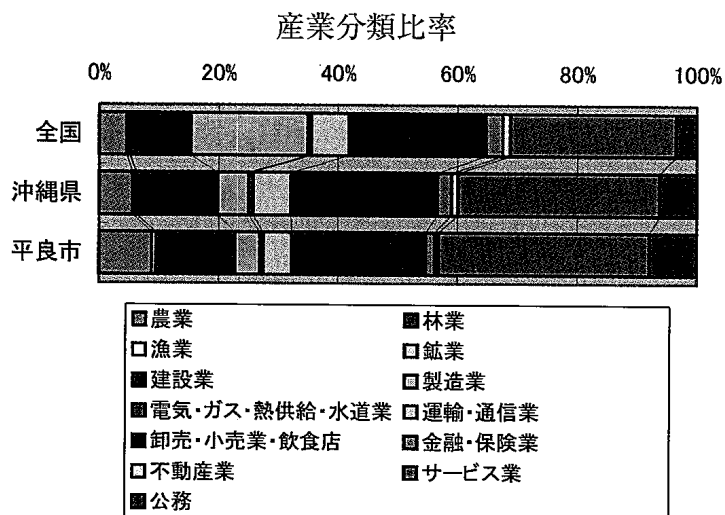
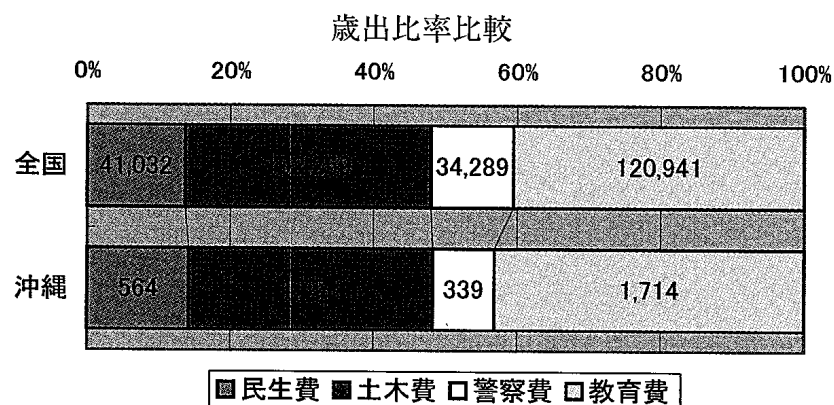
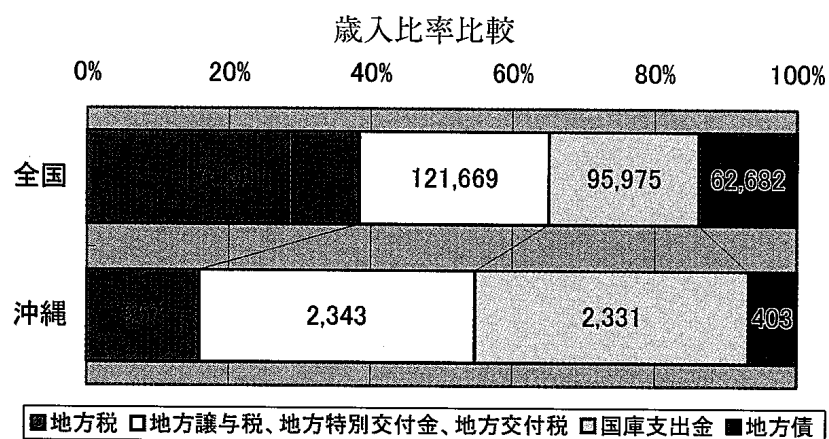
今回の調査地である池間島がある沖縄県平良市は，沖縄本島より南西約300 kmの距離にある宮古島内に位置し，宮古島北西部と池間島及び大神島からなる。市の面積は64.6 km<sup>2</sup>，人口33,701人（男16,520人，女17,181人），65歳以上人口5,642人（高齢化率16.7%）と県平均を少し上回り，世帯数

	全 国*	沖縄県*	平良市
平成7年人口（人）*	125,570	1,273	33,095
平成12年人口（人）*	126,926	1,318	33,701
人口増加率	1.1%	3.5%	1.8%
65歳以上人口（人）*	22,868	193	5,642
高齢化率	18.0%	14.6%	16.7%
世帯数*	46,782	440	12,789
1世帯あたり人員	2.67	2.91	2.64
出生数	1,170,662	17,169	423
死亡数	970,331	8,132	240
婚姻件数	7,999,999	8,990	178
離婚件数	285,911	3,902	96
出生率（人口1000につき）	9.3%	13.0%	12.6%
死亡率	7.7%	6.2%	7.1%
自然増加率	1.6%	6.8%	5.4%
婚姻率	6.4%	6.8%	5.3%
離婚率	2.27%	2.95%	2.90%
乳児死亡率（出生1000につき）	3.1%	3.8%	7.1%

(\*は単位：千)

12,789世帯である（平成12年国勢調査）。

平良市は全国平均から比べて、1世帯あたり人員は若干低く核家族化が進行しているが、出生率が高く、年少人口も比較的多い。そのため高齢化



率は全国平均より低くなっているという特徴が見られる。

また、産業構造を見ると、全国平均よりも第一次産業、第三次産業の比率が高いという特徴がある。

いわゆる「長寿」の全国分布からみると西高東低で九州、四国が高いが、人口10万人あたりの100歳比率は、沖縄が28.06人でトップ、全国平均8.97人を大きく上回っている。ここに長寿県のイメージを高めている背景があると考えられる。沖縄の長寿は有名であるが、第2次大戦における沖縄戦という悲惨な歴史がなかったなら、現在の長寿者率は、もっと大きな数値になっていたと推察される（秋坂真史，2001，前掲書）。

また、沖縄の若者は、就学や就職のために関東、関西へ流出し、20歳から30歳の青年人口の県内比率は小さい。しかし、近年の少子化、出生率低下による15歳未満人口の落ち込みは全国より小さく、年少人口比は25%で全国平均の18%より高い。こうした人口上の特長は沖縄の社会を考えるうえで重要な背景となる、と秋坂氏は要約している。

また秋坂氏は、沖縄が全国一の長寿を保っている背景の重要な要素に、温暖な気温の影響があるということも誤りではないとしながらも、しかしながら、そこに生まれ育った土地の生活習慣、食物、水、土壌、気候、文化、社会心理などの独特の特異性までも考慮して、初めてその地域の「長寿」が理解できるものであろう、とも言っている。

例えば、沖縄の場合、自然のもつ力として、暮らしが海と共存しているということ、サンゴ礁というカルシウムに富んだ地域の自然特性。また、沖縄の基礎集落の中心には井戸や湧水があって、主食品は米であり、麦、粟、豆、蔬菜類があるが、沖縄の長寿がきわめて大きな恩恵を受けたのが、カルシウム含有量の高い水と、それによるお茶の飲料摂取は全国平均を大きく上回っていることに原因づけられてきた。

しかしながら一方では、高齢社会の進展するなかで、今日最も注目を集めている介護保険料の全国と県内市町村との比較では、全国市町村では北海道の南幌町（4,100円）がトップで、最低は茨城県太子町（1,533円）であ

るが、都道府県では、1 位が沖縄県 (3,448円) で、最下位は福島県 (2,146円)。うち一人当たり診療費 (合計) では、平良市 (12年度・474,911円／3,832人) は沖縄全土53位中48位である。1 位は、那覇市 (713,616円／26,456人) である。また一人当たり診療費 (入院) は (248,573円／3,832人) は51位、一人当たり診療費 (入院外) (207,760円／3,832人) は13位、平良市は入院外が多いことが特長となっている。また、一人当たり診療費 (歯科) (8,578円／3,832人) は17位と歯科診療費は52位中比較的上位にある。また、平成12年度医療費給付状況でみると、総医療費は10位 (2,102,229,720円)、医療給付費 (現物) は11位 (2,088,085,214円)、医療給付率99.33%で46位、医療費支給費 (現物) 14,144,506円で4 位、医療費支給率0.67で8 位である。

	全 国	沖 縄
1 人あたり健康診断受診回数	30.58	21.86
1 人あたり歯科保健 (検診保健指導受診回数)	37.05	31.17
1 人あたり健康増進 (栄養指導被指導回数)	46.67	32.45

また沖縄県全体では、全国平均と比較して、健康診断、歯科検診保健指導、栄養指導の受診回数はどれも低くなっている。

## 第 2 章 平良市の福祉行政 (聞き取り)

「平成12年度からの介護保険導入によって、平良市でもどんどん民間の事業所が在宅での介護保険サービスを県の指定を受けて参入してまいりました。そのことでサービスも離島であっても平良市中心部と同じように公平に受けられるという状況にはありますね。しかし、交通費は介護保険に含まれていないものですから、離島、半島への業者の負担は大きいのですね。だから、介護保険に含まれていないその分は行政が助成として負担してはいます。

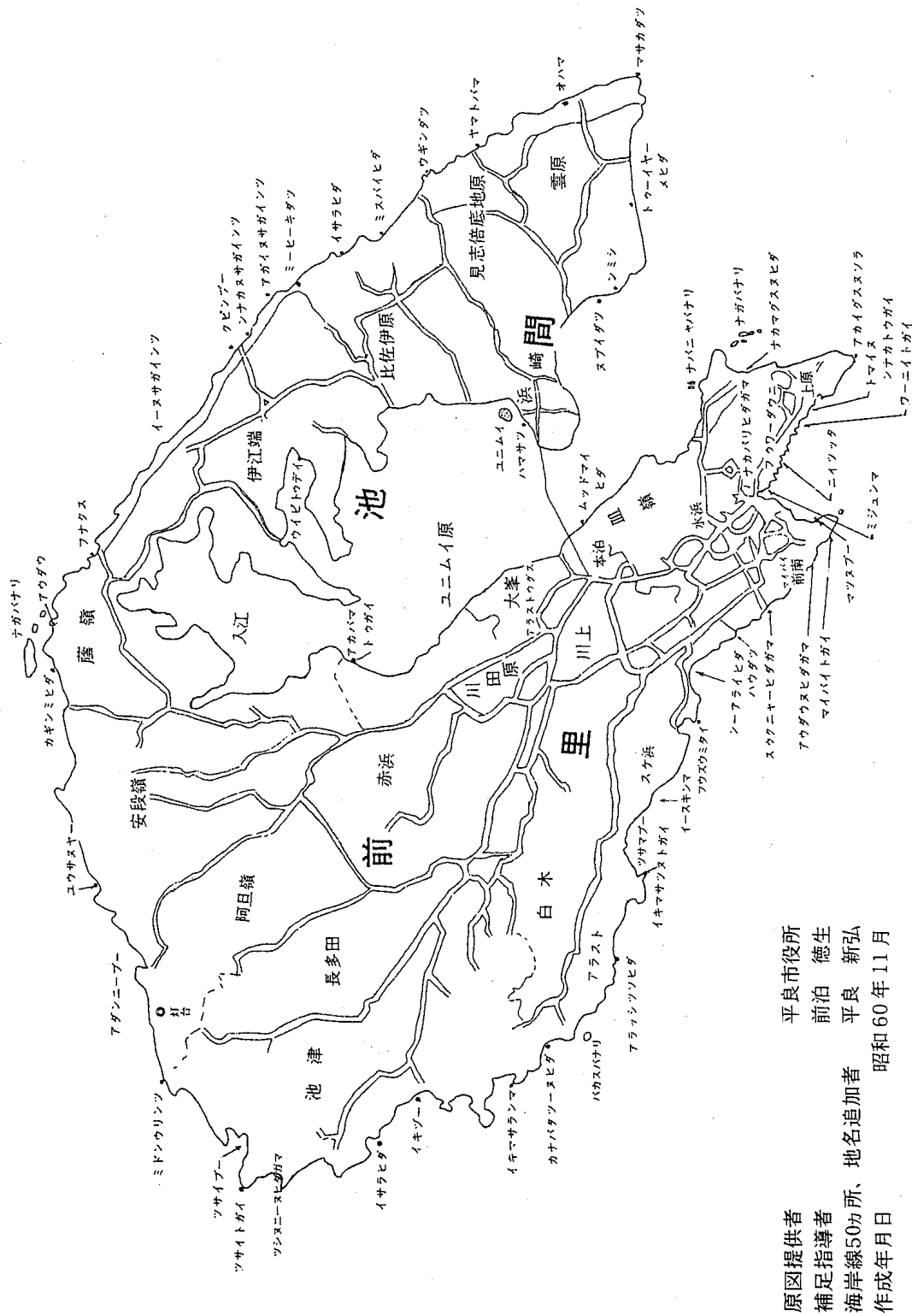


図 昭和20年迄の平良市字前里字池間全図

沖縄は介護保険認定者が全国トップなのです。そこで介護予防型の補助事業を国が設けていますので、介護保険サービスに含まれない遠隔地などの交通費のような部分をそれで補完しているわけです。」(平良市・福祉部介護長寿課)

「我々のイメージからすると、沖縄でもとくに離島、半島の高齢者にとっての介護保険サービスに対するニーズは潜在的には高くても、現実には高齢者自身や家族がヘルパーなど在宅介護サービスでも他人を家の中へ受け入れない、あるいは伝統的な家族による介護というものが根強く残されている。そういう感じをもっていたのですが、今お伺いしましたように、介護認定率が全国で最も高いという統計は意外でした。」(日隈健一)

「介護保険サービスそのものが住民に理解されて浸透しているということでしょうね。それと高齢化の進行で、家族介護に限界がきているということです。」

若い人たちが沖縄本島や宮古の中心部に移り住み始めましたので、周辺地域ではお年寄りだけの生活が急激に進行してしまってます。そういう中では、こういう制度にのっかって対応するしか方法がないというのが実態なのです。高齢化率の増加もありますが、若い人たちが都市部の公営住宅などに移り住み始めて、地域では高齢者だけの世帯が増えているのです。戦前のような家族制度とか、家族の絆だという意識が急速に崩れましたね。離島での漁業や農業生産だけでは生計も立ちませんし、教育など考えると若い人たちは地域を離れることになります。そういう傾向から市街地は、二世帯住宅など少しは見え始めました。これからはシルバーハウス、ケアハウスなどと言われるものが出てくるのではないかと思います。

しかし沖縄には、とくに離島など、伝統的な習慣に「ゆいまーる」という、お互いがお互いに支え合うというものがありますが、地方に行くほど、まだ日常生活の中で、自分のところで採れた野菜や魚などをお隣に持って行って分け合うというようなことがまだお年寄りの間では残ってはいます。何かあったら、みんなで助け合うということですね。それは食べ物を与え



合うということだけでなく、お互いの暮らしをも案じているのです。誰か身体が弱くなっていないか、困ったことがないか、そういうちょっとしたことを顔を出して、声をかけ合うことでお互いが安心できるのですね。

離島の暮らし方の知恵というのでしょうかね。物の不足した時代から、お互いが片意地を張らないで、助け合って生きていくということですね。お互いが、お互い様だから支え合うというのが「ゆいまーる」ですね。福祉というのは、本来もそうでしたが、国や県が指導するというのではなくて、地域でお互いが支え合うというのが基本ですね。それがとくに離島では、習慣でもあり暮らしの文化でもあるわけです。こうしたことはこれまでもそうであったように、これからもこれが基本になっていくでしょうね。

平良市では国や県の行政制度にあるわけではないのですが、「ふれ合いサロン」というものをやっています。これは平良市の福祉の中心になっているものですが、これがお互いの生活の確認というか、コミュニケーションの柱として、週に2回程度、集会所でやってます。これも社協のボランティアのコーディネーターが、「ふれ合い街づくり事業」の中で取り組んでいるものです。もちろん、こうした事は国や県もその効果を認めていまして、大卒で認めたものになってます。それはあちこちで自然発生的に広がっています。そうしてくると、リーダーというのか世話役も自然と生まれてくるのですね。茶菓子代は社協が出してますが、参加費は基本的には無料です。

「ふれ合いサロン」のコーディネーターやインストラクター、それに訪問介護や看護の専門家養成などやホームヘルパーは沖縄本島に学校がありまして、そこで養成された資格者などでやっています。それもいつの間にか自然発生的に広がってきた、というのが実態です。行政はそうした動きを基本的にはお手伝いするということです。

「ゴールドプラン」が国から示されて、各都道府縣市町村が自ら、実施計画を策定することになったのですが、実際は在宅介護支援センターなどにしても、小規模が多過ぎて、国が示したマニュアルと地域の実態とはかみ合わないところが出てきたんですね。とくに国の示したマンパワーの数値

などにおいては、理学療法士などのような高度な資格を持った者は足りないところも出てきましたが、だからといって、地域ではそれが強いニーズになっているかという、そうでもないわけです。やっぱり、地域は地域で実際に必要とされているマンパワーを充足することが必要なんです。そうしたものを除けば、「ゴールドプラン」で設定されたマンパワーは充足されています。

平成12年から始まった介護保険制度の導入で、民間が参入してきますと、その達成率は非常に高いものになりました。当時、それぞれの自治体で計画を作らなければならなくなって、民間のコンサルタントに策定してもらいましたが、計画は内容が大事ですが、実際は、その内容を推進していく母体の客観性ですね。地域に合ったものでなくてはならないわけです。実行できるものでなくては、意味がありませんからね。

平成15年から二期目の計画に移ります。それに伴って、いま「高齢者保健福祉計画」に取り組んでいます。これは予算がありませんから手作りです。コンサルタントが、はい出来上がりましたと堂々と持ってきまして、中身が地域の実態とかけ離れていて、実行できそうもないものでは意味がありません。

平良市の高齢化率も16%ですが、要（介）援護者が増えていく、これに伴って介護サービスの給付率も増えていく、それに伴って保険料にはね返ってくる。それにどう歯止めをかけるか、それが行政全体にとって最大の課題ですから、問題は介護予防型の事業とどう取り組むかということですよね。寝たきりを増やさない、元気老人、健康寿命をどう延ばすかです。うちでは在宅介護支援センターが中心です。つまり、それぞれの介護度をどうやって落としていくか、地域の腕の見せどころということです。

こうした一連の政策対応のねらいは、宮古では高齢者の低所得者層が、非課税者というのですか、それが約60%を占めているという現実があります。それらの保険料負担軽減を図ることがねらいです。基本は予防型事業に尽きますね。」（平良市・福祉部介護長寿課）

### 第3章 池間島の現状と課題（聞き取りと文献）

池間島は、歩いて1時間もあれば周れる小さな島であるが、池間島の中心には、かつて美しい内浦があつて、魚介類が豊富にあふれ、島の漁師は、嵐で外海が荒れて出られない日には、その内海の魚介を採っていたといわれている（松居 友，1999，『沖縄の宇宙像』，洋泉社）。

その池間の内海にはアオグムイと呼ばれる深みのある場所があつて、そこは生命の生まれるところとされていた。池間島を宮古島の人々が北極星、ネノハンマティダと呼ぶのも、そこには天界への抜け穴があり、神々の世界である美しい湖のある島という意味をもっていた。今、内海が埋め立てられて文字通り内海が湖になった様相は、まさに天界へ抜ける穴を思わせる神秘がある。また、それには高い山をもたない宮古の人々にとっては、北に位置する池間島が生と死を意味する聖なる場所であつて、神々の世界への入り口の島であつた。しかしながら、その内浦は一部葦（あし）のはえた近寄りがたい沼となつて残っているが、南側の入江はほぼ埋め立てられ、学校やサトウキビ畑になっている。

かつて、池間島の集落の南にはミジュンマ（水浜）という広場があつた。これは現在の池間小・中学校の東側にあつたかなり広い干潟であつた。その風景が一変したのは1983（昭和56）年に池間新漁港が開港し、池間丸の専用バースがその一角に設けられ、カツオ漁も潮の干満にかかわらず接岸できるようになった頃からであつた。その後、平成4年2月に池間大橋が開通し、平良市とは陸つづきとなつて、一周道路が整備され、観光客も訪れるようになった。

また、池間島の人々の自意識は高く、島出身の人たちは、自分たちを池間民族と呼ぶくらいである。かつては島内者どうし以外の婚姻を許さなかったほどで、血統が他とまじわることを嫌つたといわれていることから伺い知ることができる。そこには、自分たちがことのほか高い神に仕えるために選ばれた民であるという歴史的な自意識があるからだとも言われて

いる。

人々は南西のわずかな場所に集落をつくり、身を寄せ合うように住んでいる。北と東はサトウキビ畑が広がっているだけで住居は一軒もない。島には平坦な土地はそれなりにあるが、これまで住居は分散されることはなかった。

池間島には4つのムトウヤー（本来は一家や一族の総元の家）があり、4軒のムトウヤーが建っている。池間島の住民の区分は池間と前里の2つに分かれており、4ムトウのうち3ムトウは池間に属し、1ムトウが前里に属している。

前述の松居友の聞き取り調査によると、元来、池間と前里は、ツカサンマ（神女）も別々に選出していたから、同じ集落に住んでいても別の集団であり、もともと池間島に住んでいたのは池間の人々であり、前里の人々は後に住み着いた人々で、そのために居住地も離れている。また、ムトウヤーも池間の3つの家が固まって東にあるのに対して、前里ムトウだけが離れている。このムトウヤーは集会所の役割をもっていて、何か相談事があるとき、ウヤと呼ばれる55歳以上の重要な事柄を採決する権限をもった人々が集まる場所として利用されている。主に、三界の神々が集まる正月行事のミャークヅツを取り仕切ってきた。

しかし、今日では自治会が存在し、自治会長が役員を召集して、村の事柄の相談を進めているがこの役割をかつてはムトウが果たしていた。

池間島は沖縄本島より空路、約45分 1,290 km の離島、宮古島に位置する人口35,253人の平良市にあり、平良市とは池間大橋でつながっている。日本全体の人口が首都圏へ集中する中で、沖縄及びその周辺人口は昭和30年以降もほぼ横ばいの状況にあり、平良市も同様である。実に特徴的なのは、高齢人口5,642人に対して、幼年人口7,111人と出生率の高さにある。

しかしながら、池間島の人口は昭和34(1959)年の2,607人から平成7(1995)年の36年間で、923人（住民基本台帳人口918人）にまで減少している。離島、半島の若者が平良市中心部へ移動する傾向が強いが、少子化は

日本全体平均より鈍い。

地元の在沖池間郷友公園推進有志の会（以下、「有志の会」）の将来人口予測では、2005年には20歳代人口の100人が島外に出て30人、60歳以上が422人、それ以下は277人、総人口750人前後となる、と報告（1992年）されている。

そのとき、60歳以上が60%に達し、働き手人口は33%、うち男性135人の19%で、1人が5人以上の面倒を見なければならず、80歳以上人口136人と同数となる、と社会問題化への警鐘を鳴らしている。

かつての池間島は鰹漁最盛期1953年から60年にかけて、鰹船13隻、鰹製造工場10、鰹漁船従漁師520人、女工数380人、工場従業者80人という、実に鰹漁業に携わる人口だけで1,000人、合せて鰹節削り工など含めると島の総漁業従事者は1,300人近くになっていた。

その後、40年で漁業従事者は5分の1（238人）にまで減少している。今日では、夫は専従漁師で女子は農業、海に行けない日は夫婦で黍作農業を兼ね合わせ、それでも働き盛りの労力者は100人にも満たない。

95年度の漁業者の月平均生産額は73,200円、必要経費を引くと35,000円、黍作農業は月平均で23,973円、これも必要経費を引くと1万円余りだと言われていることから、一家の収入は50,000円足らずになる。

こうした池間島の暮らしの現状の中で、「有志の会」をはじめ行政、住民の間では生産観光漁業への道を探っている。

池間島を宮古広域北観光地として位置づけ、海と八重干瀬、それに鰹1本釣り、深海1本釣り漁業、栽培漁業、体験観光等がその戦略となって、生産性のある観光地としての発展が考えられているが、その前に池間島特有の風土が障害となっていると「有志の会」では分析している。

その池間の風土を「池間民族」ととらえ、土地柄としての土地の生活・精神・宗教文化の遺産からくる思想、行動の根源に置いている。いわゆる「池間民族」の文化遺産を「温情、情け深さ」、「開放的陽気さ」、「ことなかれの」、「争事回避傾向」、「島の狭義思考」、「依存型傾向」などとして挙げ

られている。

こうした精神構造と行動力が今日の池間島の発展を大きく疎外している  
と分析している。

池間島では高齢化による農地の荒廃が進行している。畑地が雑草やぎん  
ねむに蔽われてるのが近年目立ち始めたという。高齢者が亡くなったり、島  
外の息子たちの家に引きとられていたり、病院に入っているからだとい  
う。農業従事者数も1995年には230人だったものが、2年後の1997年には  
182人にまで減少していることでも明らかである。

高齢化が極端に進行した池間島では、年々農耕の出来ない畑地が原野化  
されているのが目立ち、一方では、島を離れた人たちによって売られた土  
地に島外の人たちによる別荘が建ち、また観光客や釣り人による池間の自  
然環境の保護が地域の最も重要な課題となっている。

「池間の湿原は全国五百の湿原にも指定されているのですが、年々水が少  
なくなっているものですから、沖縄県としても何とか保全しようと注目は  
しているところなんです。

元来、池間の湿原は奥の深い入江でしたので海水であったのですが、港と  
の間が埋め立てられる感じになって、淡水化したのですね。それで植生も  
大きく変わったのです。しかし、それがまた貴重な湿原として注目された  
んですね。「野鳥の会」などは、何とかして保全しようと運動されているわ  
けですが、考え方も二分されまして、一方では元の海水に戻すべきだとも  
言われるのです。

そうしたこともありまして、池間島の開発というときには、いつもこれ  
が争点になるのですね。それで開発はいつもストップします。淡水だと、水  
鳥や植生が売り物になりますが、海水だと魚が豊富に戻るということで  
すね。」(市役所・企画)

「また、神々の棲むウタキや井戸が多いのですが、これを何とか保全しな  
がら島の生態系を守りたいのですが、島の環境を守り、生かした開発を進  
めたいということは誰もが同じですが、いろいろ考え方が異なりますので、

その方法論で行き止めになってしまうのです。県の上位構想と地元との間で合意形成が進まないのですね。だから、構想や議論はいろいろあるのですが、今だにこれはというものはありません。」（市役所・企画）

「この20年前に一度訪ねましたが、当時から比べると池がかなり狭くなりましたね。海とつながっていたところが埋め立てられて、中学校が建っている。これで深い内浦だったものが、切り離された形で池となった後に海水が池に入らない分だけ池も狭くなっていったのでしょうね。島を歩いていても観光で訪ねている人たちを除けば、地元の若い人や子どもと出会うことがありません。人口減による過疎化や高齢化、それに土地の切り売りによる他所からの流入、それも定住化ではなく別荘のように日常性をもたない人たちの流入が急速に進んでいるようですが、これからの島の発展策を考えるとときにもそういう現実をキーワードにせざるえないでしょうね。」（柴田千代治）

「そうです。私個人も同じように、島の自然を生かした高齢者の健康ということを目玉にして地域の発展策というか、これからも定住して、暮らしのある島を考えるべきだと思っています。宮古島全体がそうあるべきだと考えてますが、すべての資源を「健康」をキーワードに考えてます。

平良市の中にも「健康班」というのを置まして、福祉のそれとは少し違った発想といいますか、概念でとらえています。市長が医師だということもありまして、平良市全体を健康都市といいますか、すべての計画の理念にしているのですね。高齢化への対策というか、百歳への挑戦というのか、そういう戦略ですね。」（市役所・企画）

「福祉の中で「医療や福祉」を前面にとらえてきた時代の中では、結果として“寝たきり”を作ってしまった経験も少なくなかったのですが、平良市のように企画がこれからの高齢化福祉のキーワードに「健康」をとらえ始めると、健康寿命を延ばす、結果として医療費の削減への道を探るという方向に変わっていく、“寝たきり”を作らない元気老人の創出という政策転換を図るということですね。」（日隈健壬）

「人も街も「健康」というキーワードで、市民による手づくり計画で、自分たちで実行に移すという市民参加ということで、平成13、14年度事業は考えてきました。それに、東京医科歯科大学が事務局で、フィリピンやパラオからも参加していただき、WHOのシンポもやりました。」(市役所・企画)

平良市の中で池間は民族学上も多少特異な存在であるが、平良市の地域発展策の柱である「観光」の要でもある。しかしながら天然の内浦をもっていた池間島から、架橋時代に入ってその内浦は埋め立てられることによって湖となり、そのことが野鳥の宝庫といわれるに至って、池間の自然環境を観光の要とするという立場を確認する中でも、政策対応は二つに分かれて先に進まない。

問題は漁業の衰退とそれに代わる地域振興の柱としての観光政策の行き詰まりの中で、島の高齢化、人口減少による社会的過疎化は進んでいる。池間島のもつ伝統的風土の崩壊の中で、現実には高齢者たちは平良市の福祉計画と、そのサービスの供給は伝統的な池間の習慣、慣習の中の失われるものと共に受け入れ始めている。

現在、池間島は池間と前里を合せて811人(平成12年、住民基本台帳人口)男405人、女406人、世帯数373である。島の面積2.79km<sup>2</sup>。池間小学校全児童数33人、池間中学校全生徒数14人。池間自治会による70歳以上の敬老者数(平成12年度)は下記の表の通りである。

池間自治会70歳以上敬老者(平成12年度)

		現在、島内	島外	池間島人口に
男	148	140	25	占める割合
女	218	201	8	
計	366	341	17	41.3%

- ①親子揃い組 7組、(うち女2人4組、男女2組、男2人1組)
- ②兄弟揃い組 6名(1組)、5名(7組)、4名(9組)、3名(20組)、2名(41組)
- ③夫婦揃い組 85組



特徴的なのは、70歳を超える人口が池間島では41.3%という高さで世帯数373に対して70歳以上人口366、うち夫婦がそろっている世帯が85組で170人、47%は夫や妻がいる。また、兄弟がそろっている者は70歳以上人口366人のうち219人で約60%の人が70歳を超えた今も兄弟がいる。

#### 第4章 個別聞き取り調査

△小禄朝子さん・池間（大正2年10月10日生まれ）

昨年（平成13年5月）、長男（昭和11年生まれ）が死んでからは、テレビを観る元気もなく、毎日ラジオばかり聴いているという85歳の朝子さんは、同じ歳で島の小学校で同級生だった小禄キクさん（大正2年10月25日生まれ）の話によると元気で活発な女だったらしい。

若い頃には名護市や宮古へ何度か働きに出たが、人生のほとんどは池間に居たと本人は語る。

しかし戦時中に、島の女たちがそうであったように台湾へ兄弟や子どもたちと漁を加工する女工として出稼ぎに出たこともあったという。ご主人は13人ほどの島の漁師を連れてボルネオ近海にまでカツオ漁に出ることが多かったというが、応召になったのも、そのボルネオへ出漁中のことだった。

〔望月雅彦，2001，6，『ボルネオに渡った沖縄の漁夫と女工』，P.150によると，1944（昭和19）年5月に，徴兵検査がボルネオ島の現地で行われている。合格者は同年10月に入隊し，初年兵教育の後，翌年1月には配属先部隊に向かっている。沖縄出身者は漁船員としての経験や潜水漁夫としての技を買われて，船舶土兵10連隊に配属された者が多い。小禄栄世氏は宝泉丸からラナウ教育隊へ，その後有谷部隊，尾田隊を経て戦死。〕

実の娘さんは健在で大阪に住んでいるが，時々，島の祭りには子ども連れで戻ってくるらしく，孫やひ孫にも恵まれている。

長男の出産も島の年寄りに取り上げてもらうという時代の中で，戦争で

亡くしたご主人との間で生まれた子ども2人は育っている。

昨年まで早朝、池間漁協で仕入れた魚を向かいの平良市へ行商するのが、一家の稼ぎで、家の軒先に小さな店を出しては、平良市の仲買い先で仕入れた雑貨を並べて売ってきた。

やがて、島と平良との間に橋が完成（平成4年）すると、息子のクルマで行商し、昼間は少し離れた畑でキビを耕してきた。行商は魚を仲買いし、島へ戻る帰りは、平良への仲買いの魚で稼げたお金で島民から受けた注文の品を平良で買っては、少し値をつけて売るという毎日であった。池間と向かいの平良市の中心部に近い港へは池間丸で約1時間ばかりであったが、朝9時には常連の店へ魚介類を届けていた。

夏も冬も行商は欠かさなかったが、台風のときなどに漁がないときだけは休んだ。しかし、不思議に病気にはならず、元気で働く朝子さんは新聞で2度紹介された。

食べ物もいいし、島が好きだったから、と朝子さんは言うように戦後は出稼ぎで島は出なかった。

朝子さんのような仲買い行商人は島では10名ぐらいいたが、今では若い（70代）人が2人だけになっているという。かつての仲間はすでに死んでしまっている。

行商仲間には勝連セツさんがいて、キクさんとは一番の仲良しだったらしく、2人は行商の間に平良で映画を観ることもあったという。島への戻りのフェリーの時間までが彼女たちの自由で幸せな時間だったらしい。

今でも記憶に残っているという映画「ほととぎす」の主人公とヒロインの台詞にあったという「戦争から戻ったら吉野の桜を見に行きましょう」、というくだりの会話を思い出しながら、また主題歌を口にする。（主人公の）武雄が戦争から戻らなかったからね、という。ご主人も戦争で戻らなかった朝子さん自身のこととどこか重ね合わせている。

朝子さんは三男だったご主人とは同じ池間の生まれ育ち、父親も母親も同じ池間だったという。

意外なことに、ご主人が応召中に朝子さん兄弟、家族、子どもたち揃って一時台湾へ出稼ぎに出ている。家の庭先に掘られた防空壕に貴重な物は入れて出たが、戻ると、何もなかったと言う。

[英領北ボルネオでは敗戦当時の在留邦人は1946(昭和21)年、10,691名であった。内訳は、将校539名、下士官・兵8,319名、邦人男子720名、女子505名、子ども608名がゼツセルトン収容所に集められている。(赤領真吉、「悲運・沖縄への引揚者」、『ボルネオ10号』)。彼らは同年、練習巡洋艦鹿島で、昭和21年3月31日広島県大竹港に帰国、しかし、受け入れ体制が充分でなく、その間に死者が100名を超えた。速やかに郷里沖縄に帰還出来るよう連合軍と交渉し、鹿児島市下伊敷の引き揚げ者用宿舎に身を寄せることになった。このときの様子を戦争以上の惨事だったとも同書で紹介されている。8月になって、鹿児島から琉球人の送還が始まった。宮古地域では、アメリカ軍との上空戦闘はなかったが、空襲などで非戦闘員にも200名という多数の死者が出ている。]

戦時中は池間の上空にも米軍の飛行機は飛来して、子どもたちはよく外でそれを眺めては、あれはB29型だとか、何型だとか叫んでいたらしいが、やがて敗戦になると米兵が島にやってくることもあった。女たちは恐がって外に出ることもなかったが、子どもたちは興味深く彼らに接している。

終戦後の朝子さんは仲買行商一筋で働いてきたが、そのお陰で貯金もあるし、年金で十分生活できるし、キビ畑へは毎朝8時には出かけている。時々、ヘルパーをやっている姉の娘が訪ねてくるが自分で食事や掃除はやっているという。平良への行商を近年までやっていたということもあって、地元でゲートボールもやったという経験はない。

池間の女は再婚はしないとよおー、と言う。大の仲良しだった小緑キクさんも、若い頃は嫁にもraitたいという人は沢山いたが、恐くて男はさけてきた。台湾でもそうで、とうとう池間に逃げて戻ったくらいだったという。

朝子さんは「キクは何か話したか」、と度々訊ねてはキクさんのことなど思い出しながら昔を話す。そのキクさんの家とは 100 メートルも離れていない。

△小禄キクさん・池間（大正 2 年 10 月 25 日）

みんなは足りないというけど、キクさんは年金だけでも十分生活できているという。1 万円余るときもあるし、2 万円余るときもある。足りなくて、もっと欲しいと思ったことはない。お店に行けば何でも欲しくなるけどね。いつも行く人は足りないさね。店に行くと知らないうちになんでも買ってしまうからね。

朝のテレビ番組も楽しみじゃないけど観てはいるさ、今では何の楽しみも、うれしいこともないし、早く死にたいさ。あの世に早く行きたいと、いつも思っているけどこんなに生きている。思うようにいかんからね。知ってる人は早く死んでいってるけどね。

池間の夏は暑いからね、冬の方がいいね。春や秋もいいけど、夏よりは冬がいいね。健康に気をつけてね、他人にあんまり迷惑かけられないから少しは歩いているけど、この夏はとくに暑いけど、扇風機もつけたことないし、冬だってコタツもストーブもなしに、毛布をかぶって寝てるだけさね。夏でも足が冷めたいからね。

年金では米と野菜を買うだけで他に買い物はない。1 ヶ月に 5 キロの米があれば足りる。食事は 3 回分、自分で作ってる。他に仕事もないし。

冷たいものは飲んだことはない、熱いお茶だけ。お茶が一番いい。

庭で少しは野菜を作ってるし、メイがときどき持ってもくるからね。衣類も 2, 3 日に 1 回洗って干しておいて、それをそのまま着てる。

いい人から先に死んでいくし、悪い人は後に残るから私は神に見すてられた。そうよ。私は子どものときから友達もあんまりいなかったし、大きな声で笑ったこともない。運動も出来なかったし、遊びで友達と楽しんだこともない。

仕事ばかりやった。7つ、8つの小さいときから、畑や水汲みなど、お母さんの手伝いは言われなくてもよくやった。(島の女はよくやる) 花札も踊りもやったことがない。9人兄弟で今でも4名が生きている。私は下から2番目。今でも妹の子のメイやオイから沢山年賀状がくる。しかし一緒に住んでいないからね、何もない。

敬老会にも70歳のとき、体育館でやった式典に出たけどそのときだけであとは出たことがないさ。部落の運動会にも出たことない。子どものときも運動会はいつもビリだから好きじゃなかったけど、勉強も運動会と同じように一番、二番と決めてた。その勉強は一番で表彰状や褒美をもらってた。しかし、ハイハイと手を挙げたことはなかった。

60歳になってから健診にも行ったことがないから血液型も知らない。だから病院に行ったこともない。しかし75歳のときに突然眼が見えなくなって宮古病院で手術した。そしたら小さい字も読めるようになった。上等な女の先生だったけど、千里眼になったと私が言ったら笑ってた。本を読めるようになったのがよかったね。ラジオも眼が覚めるとつけて、眠るまで聴いている。

沖縄に来た総理大臣の小渕さんが死んだときも朝4時40分に聴いた。そのとき4時30分に死んだとラジオは言っていた。あの人はサミットが九州で決まっとったのを沖縄にもってきた人だからね。沖縄では銅像を建てて、奥さんや娘さんが来たね。

ごはんと野菜だね、池間の人のはあんまり漬物はしないね。

宮古には眼の手術のとき、沖縄の那覇にはオイが生まれたときのお産の介護に1ヶ月ぐらい行った。それと、家族が入院したときにも介護で2年も3年も行ったことがあるけど、自分のことで他所へ出たことはない。船にも酔うし、自動車もいやだし。

年金がなかったら生きていけなかった、これがあるからよかったよ。自由に遣えるしね、着てるものは全部知ってる人が買ってきてくれたものばかりだしね。

ラジオを聴いていると知らなかったことも分かるし、言葉も忘れなくて済むね。片耳はさ、自転車に押しつぶされて、今では聞こえなくなった（そのときの加害者の名前は今でも他人に言ったことはないという）。

好きな人もなかったし、好かれたこともなし、好きなこともない、井戸の中のかわずよ、自分は。どこにも行かず、誰にも会わないからね。「好きだった人が死んだんでしょ」という質問に、いいや、違う。好きな人がいたら、あれと（その人と）一緒に死んだらいいじゃないか、好きな人はいなかった。

「真面目だったんだね」という質問に、違う、自然に生きてきただけ。家族の者の手伝いや介護ばかりやって生きてきた。好きな人ができる時間もなかったし、そういう人もいなかった。

「神さんはいると思いますか」という質問に」思わない、どうしていると思うのか。神さんに頼ったこともない、何もしない。うれしいことも楽しいこともないけど、寂しいこともない。寂しかったら神さんのところに行くさ。

みんなと遊びたいとも思わない。家にいて毛布かぶって眠っていた方がいい。

前の市長のときは正月に5千円のお年玉というて置いていった。今の市長になってからは何もくれない。

まだ針を使えるから、縫い物やらボタン付けやらできる。裁縫は好きだった。洋服でも大きければ今でも直せるし、袋物なんかも作ったりするね。

テレビと冷蔵庫とラジオはこの家を作ったときに買ったけど、テレビも2つ目、冷蔵庫も2つ目、だけどラジオは今でもずっとこれを使っている。この2つ目のテレビも朝だけは観るけど、ラジオは一日中つけている。ラジオからいろんなこと知らされるからね。ラジオの話を聴いていれば寂しくない。

冷たいものは何も作らないから、あんたたちに何も出さなかったね。突然来たからビックリした。何も知らないからさ。

参 考 文 献

- 沖縄県，2002，『沖縄県統計年鑑 平成13年度版』，沖縄県統計協会。  
沖縄県，2002，『長寿社会対策ハンドブック』，太陽出版社。  
平良市，2002，『平良市統計書 平成13年版』，平良市役所。  
平良新弘，2002，『海人の島』，自費出版。  
望月雅彦，2001，『ボルネオに渡った沖縄の漁夫と女工』，ボルネオ史料研究室。  
秋坂真史，2001，『沖縄長寿学説』，OKINAWA BUNKO。  
松居 友，1999，『沖縄の宇宙像——池間島に日本のコスモロジーの原型を探る』，洋泉社。  
仲宗根将二，1998，『宮古風土記（下巻）』，OKINAWA BUNKO。  
仲宗根将二，1997，『宮古風土記（上巻）』，OKINAWA BUNKO。  
松崎俊久，1993，『沖縄発爽やか長寿の秘訣』，学苑社。  
長田紀信，1963，『沖縄の長寿者』，安木屋書房。

今回の調査にあたり池間の仲間章郎夫婦に多大なる協力をいただきましたこと，感謝いたします。